

『井上靖研究』第十六号 抜刷

平成二十九年（二〇一七）七月二〇日 発行

井上靖 「異域の人」論

—— 班超の生きる意味 ——

劉 東波

井上靖「異域の人」論

— 班超の生きる意味 —

一、はじめに

「異域の人」は、昭和二八年七月一日発行の『群像』に発表された短編歴史小説である。井上靖の「西域物」の初期作品(第三作)として、後に短編集『異域の人』(講談社、昭和二九・三三)、井上靖小説全集『第一五卷(新潮社、昭和四七・一〇)、『井上靖歴史小説集』第一卷(岩波書店、昭和五六・六)などに収録された。

本作品以前に、井上靖は西域の器物を中心に、二つの短編小説、小説「漆胡樽」と「玉碗記」を創作している。小説「漆胡樽」と「玉碗記」は、西域の器物の流転を語る作品である。一方、「異域の人」は、西域の人物を中心とした作品である。井上は「異域の人」について、「特別な作品」と述べている。この「特別な」の意味は、作品の発表時期と関連がある。では、「異域の人」は井上の「西域物」でどのような位置を占めているだろうか。

劉 東 波

これまでの「異域の人」に関する研究では、奥野健男氏は「蒼き狼」解説(『蒼き狼』旺文社、昭和四五・七)で「班超の孤独なたたかいと挫折の姿と西域そのものの持つ夢とが重なりあう。」と述べ、浅見淵氏も「無功利の美しさを」(『東京新聞』昭和二九・一〇・一五)で「宿命的な孤独な姿を写し出す」と論じている。また、富士正晴氏は「井上靖著『異域の人』(『近代文学』昭和二九・八)で、「異域の人」が創作された頃の作品について、「孤独感が深く沈んで凄まじいものが風のように流れる」と評している。

以上の論考について、高木伸幸氏は「井上靖「異域の人」考——「孤独」と西域の沙漠——」(『井上靖研究』第三号、平成一六・七)で、「いずれも大きな枠組みにおいて「異域の人」の特色を捉えている」が、「本格的な論考とは言えない」と述べ、小説と典拠との比較検討を中心に、井上靖の史料活用の方法について考察を行った。

高木氏の論によると、「疏勒王忠の裏切り」と「趙の逃

亡」は、班超の「孤独」を深める役を果たしている。また、「沙漠の苛酷なイメージを描いて、「孤独」のモチーフは硬質の詩情として表れ」ていると論じた。

蒲生芳郎氏は「井上靖の中国関係歴史小説・解題」（基督教文化研究所研究年報）第一八号、昭和六一・三）で、本作品の結構は班超の「耿々たる孤独を強調するように布置され、全編を通じて硬質の悲劇的印象が通底している。」と述べている。

井上文学における「孤独」は多くの研究で、しばしば言及されている。「異域の人」は井上の本格的な西域小説であり、異域で三〇年も暮らした班超の孤独に作者の創意を加え、その孤独を深めて表現している。これが本作品の魅力の一つだと思われる。しかし、井上の創作意図は、その孤独を描くことであつたのだろうか。また、本作における班超は、悲劇的な人物なのだろうか。これらの疑問に対して、まだ考察する余地がある。

「異域の人」の発表後、「僧行賀の涙」（『中央公論』昭和二九・三）や「敦煌」（『群像』昭和三四・一―五）などの「西域物」で、西域で活躍している人物が多く描かれている。「異域の人」では、趙という武将が登場している。それに対して、『敦煌』では主人公として趙行徳が登場している。また、「洪水」（『聲』昭和三四・七）では、部隊長・素勵の部下として張という人物が登場し、「狼災記」（『新潮』昭和三六・八）で、主人公である小部隊長・陸沈康の友人の小部隊長・張安良という武将も登場している。したがっ

て、本作と他作品の間につながりがあるのではないかと思われる。

本稿では、先行研究の成果を踏まえながら、井上靖の創作意図を検討する。さらに、典拠として指摘されている資料との比較を通じて、本作における班超の生きる意味について迫って行きたい。

二、初期の「西域物」

井上靖は自分の西域に対する興味は「学生時代」からのものであると述べている。井上の学生の頃は、まさに西域ブームの時代だった。二〇世紀初頭、敦煌文書の発見により、多くの国の探検隊が西域へ向かった。日本では、井上が在籍した京都大学を中心に、敦煌学の研究成果が次々と発表された。そのため、井上の学生時代、西域、シルクロードに関することは多くの注目を集めた。

奥野健男氏は西域について、「日本民族には、古来から西の方向に対する特別な憧れがあつたよう」であるとし、「西域への憧れは井上靖個人の単なる趣味とか道楽ではない。どのぐらい多くの日本人が西域やシルクロードに秘かに夢を燃やしているか。」と述べている。井上が初めて西域への憧れを文学化した作品は、散文詩「漆胡樽」（『文学雑誌』昭和二二・五）である。さらに、その詩から小説「漆胡樽」（『新潮』昭和二五・四）が派生した。

小説「漆胡樽」では、漆胡樽が西域から正倉院の倉庫まで流転する歴史が四つのエピソードを通して語られている。

その姉妹編の小説「玉碗記」で、西琳寺の玉碗の発見によって、西域から伝来した瓜二つの玉碗が再会するさまが描かれた。

この二作品とも、西域の器物を中心に、ストーリーを展開している。作品の舞台は、西域から現代の日本へ橋渡しされている。

一方、「異域の人」の主人公は、西域経営に尽力した班超であり、小説の舞台も西域に限られている。「異域の人」は古代の日本も現代の日本も関わっていない。その点で「異域の人」は本格的な西域小説といえるだろう。

「異域の人」と「漆胡樽」の関係について、井上靖は以下のように述べている。

『漆胡樽』を書く時、既に『異域の人』の構想もできており、その執れを、この種の作品の第一作として発表すべきかなかなか決らなかつた。作家としても大切な時期にあつて、ロマンティックな仮構小説を書くべきか、史実に則した歴史小説を書くべきか、容易に判断がつかなかつた。そして結局気らくに楽しんで書けそうな『漆胡樽』の方を選んだのであるが、脱稿して、雑誌「新潮」に渡してから、それが発表になるまで、やはり『異域の人』にすべきではなかつたかという思いを払拭できなかつた。そういう意味で、作者としては、この「自選集」に二作を収めた。一つだけでは片手落ちになってしまう。今考えると、どちらを先

に発表してもいいようなものであるが、小説家として固まるか固まらないかの瀬戸際であつたので、このようなことに気遣わなければならなかつたのである。作品として、『漆胡樽』と『異域の人』とで、どちらがいいか、私は知らない。ただその執れもが、『獵銃』発表以前に構想をたてていた私にとっては特別な作品なのである。

井上が述べている「瀬戸際」とは、大阪毎日新聞社から退社した頃である。小説「漆胡樽」を発表した翌年、昭和二六年五月、一五年に亘る新聞記者生活に終止符を打ち、井上靖は作家として独立した。つまり、「漆胡樽」も「異域の人」も井上にとって、作家のプライドに関わる作品といえるだろう。「異域の人」の構想は「漆胡樽」と同じ頃と見られるが、発表は「漆胡樽」の三年後であつた。

内容の面では、両作品には似ているところがある。例えば、登場人物について、「漆胡樽」には漢の時代の「張騫」、「異民族の女」、「胡地に留まること既に十年の陳」などが登場する。特に、その中の陳という人物は、西域で一〇年を暮らし、異民族（匈奴）の女を連れて逃亡する。この人物は、「異域の人」における、于闐人の女を妻とした趙と似ている。また、「西域の三十六国」、「上に飛鳥なく下に走獣なし」、「沙漠の熱風」など西域の環境に関する描写も既に「漆胡樽」に出ている。「異域の人」は「漆胡樽」から影響を受けたことは確かである。

三、典拠との比較

「異域の人」の創作について、井上は先に見た通り、「史実に則した歴史小説」と述べている。先述した先行研究でも、本作は「歴史の事実¹⁾に忠実」(奥野氏)な作品であり、或いは「全体の叙述は史料精査に基づく印象がつよい」(蒲生氏)と論じられている。しかし、趙のような創作上の人物も登場し、史料から離れている記述も見られる。では、本作における虚構、或いは改変はどのようなものだろうか。また、作者の創作意図は何であろうか。以下ではその究明を試みる。

歴史小説を創作する際の、史実の扱いについて、井上は以下のように述べている。

私は史実だけを取り扱った小説だけが歴史小説であるとは考えない。若し史実だけを取り扱うにしても、なおそれが文学作品である以上、作者は史実と史実の間にはいつていかなければならぬ。

歴史小説が小説である限り、そうした箇所を持つことによつてこそ文学として支えられているのではないかと思う。

井上にとつて「史実に即した」作品であるとしても、「史実と史実の間」に工夫をこらすことも重要な作業である。本作における井上の創作方法を明らかにするため、一

五の用例を抽出し、典拠との比較研究を行う(以下、付録を参照)。

本作の典拠について、井上は『井上靖歴史小説全集』第一巻の「あとがき」で「『後漢書』「班超伝」に仰い」だと述べている。資料2の〈作品本文〉でも、「『後漢書』班超伝」と明記されている。また、高木伸幸氏は「班超伝」以外の文章や、その他さまざまな西域関連の文献を参照している」と述べている。

典拠と比較してみると、井上の典拠の扱い方は、「史料そのまま」、「史料を総合する」、「史料を改変する」、さらに史料を踏まえ、「架空の人物・事件を創作する」などがあると思われる。

まず、「史料そのまま」については、資料2、資料5、資料7、資料8、資料11などが挙げられる。西域の地形、風土などは、資料5、資料7などのように、史料そのままに書かれている。特に、資料11で多くの詳細な数字が書かれている。「七千の兵」、「三千八百の首級」、「三千余人の捕虜」、「三万七千頭の駱駝と羊」など、すべて『後漢書』「耿恭伝」のままである。

次に、「史料を総合する」ことについては、資料3、資料6、資料8などが挙げられる。資料8のように、別々の史料を一つの記述に総合している箇所もある。資料3と資料6では、羽田亨の『西域文明史概論』も参照している。先述した高木氏の論では、「井上の愛読書の一冊」であり、『西域文明史概論』と「異域の人」本文に似ている記述が

あるため、井上は『西域文明史概論』を参照したと述べている。

この研究書に関して、山田哲久氏は「井上靖『漆胡樽』論—〈歴史〉への態度—」（『同志社国文学』第七〇号、平成二一・三）で、「漆胡樽」創作の段階で、井上が『西域文明史概論』と市村瓊次郎の『東洋史統』（富山房、昭和一四・一—昭和一九・一）などの史料を「参照した可能性が高い」と論じている。また、『敦煌』の創作過程について、井上は以下のように述べている。

（前略）そしてそれを小説に書くために、何となく準備し始めたのは昭和二十八年（一九五三年）頃で、それから五年ほどを準備期間に当て、史書、文献を読み漁った。いま振り返ってみると、なかなか楽しい時間である。

以上のことから、「異域の人」が発表された昭和二八年頃、井上が既に多くの史料収集を始めたことが分かる。「異域の人」創作にあたり、井上は『西域文明史概論』のみならず、さらに大量の史料を参照したと考えられる。それらの史料の多くは、作品で直接引用されていないが、「作者のイメージを形成する上に使われた」といえる。

もう一つの例を挙げる。本作で「于闐」という記述が多く見られる。本作の主要な典拠である『後漢書』では、すべて「于寘」と表記されている。その一方、『法顕伝』や

『高居晦于闐紀行』¹⁾ などでは、すべて「于闐」と書かれている。したがって、「于闐」の表記についても、井上は多くの史料を総合し、小説家の判断で本作にふさわしい表記を選んだと見られる。

「史料を改変する」ことについては、資料1、資料9、資料10、資料12、資料13、資料14、資料15など多くが挙げられる。この中で、資料14は、典拠の記述の順番を替えている。資料1（口弁→無口）、資料12（帝、超の忠を知る）に言及せず）、資料13（吏、忠を斬る→自ら刀を抜いて忠を斬る）は、人物造形などのため改変を行った箇所と見られる。それに対し、資料9、資料10で、細かい改変が見られる。その意図は何だろうか。資料9を見ると、典拠では「耿恭も閼龍も、「戊己校尉」と書かれている。本文では「耿恭を戊校尉、閼龍を己校尉に任命した」と描かれている。

井上が『後漢書』のどの版を参照したのかについては不明だが、歴史学の研究で、「戊己校尉」をめぐる、今日までも議論が続いているという。李炳泉氏の研究によると、今流布している各版の『後漢書』では、耿恭と閼龍は「戊己校尉」と書かれている。本作中の内容は史料の記述を改変して書かれている。では、井上が両者を別々の官位に書き分けた根拠と理由はどこにあるのだろうか。

清の時代の王先謙氏編纂の『後漢書集解』と「異域の人」の対照調査してみると、資料9の該当箇所には、「戊己校尉」の詳しい注がある。注では、賛否両論が載せられている。特に、北宋時代の歴史家の劉敞は、「理を以て、

之を見ると、恭は戊校尉、寵は己校尉となり」と主張している。「戊己校尉」が書き分けられたことから判断すると、井上は歴史書の本文だけでなく、それに関わる研究者の注釈も全部参照した。

また、資料10では、典拠の「箭神」から、「神箭」に変えている。細かいところだが、順番を変えると、完全に別の意味になる。この点についても、『後漢書集解』の、資料10の該当箇所^①に注がある。清の時代の学者の惠棟氏は注で、「東觀記によると、神箭と書かれている。」と述べている。『後漢書』の本文を見ると、その場面で、「毒矢」を敵陣に発射している。井上は『後漢書』本文の前後の内容を検討し、注にある「神箭」説を採用した。したがって、井上が「異域の人」を創作した時、『後漢書集解』を参照したと推測できる。本作品の主な典拠、『後漢書』の内容を参照した時、井上がただ単に史料を作品に引き写すだけでなく、様々な史料の解釈も研究し、正確な史料を追求した上で、創作を行っていたことが窺える。

「改変」については、資料15に見逃すことのできない記述がある。資料15の典拠の内容をみると、班超は帰国を望み、和帝に上疏したが、返事はなかった。二年後、妹の班昭より、上書して許可を得たというのである。鄧桂校氏の研究によると、班昭は、しばしば朝廷に出入りし、一定の影響力を持っていた。兄・班超の帰国許可を得るために、妹・班昭が書いた「為兄超求代書」は優秀な文学作品として高く評価されている。

井上は、班超の「上疏」と班昭の「上書」を一つの上書文として綴っている。しかし、「疏」は臣下より皇帝への公式文書のため、自称は「臣」となっている。それに対し、班昭の「書」では、自称は「妾」を用い、兄の班超を「超」と称している。井上の「異域の人」では、班超の上書文で、「臣」と「超」が混用されている。

本作では、班昭は登場していないが、彼女の「上書文」が班超の「上疏文」に書き込まれた。この点から、井上は班昭の文書の価値を認めていると見られる。しかし、作品本文に、班昭を登場させない理由は何だろうか。

「上疏文」は作品の結末のところに当たる。結末の部分まで、班超に関わる登場人物として、井上は同僚の裏切り（李邑）、同盟の崩壊（疏勒王忠）、部下の逃亡（趙）など、異域で「鳥獣の心」を持っている者たちを描いた。それに対し、班昭は班超の家族であり、班超が異域から離脱することに手を貸した人物である。班昭の「助け」と本作の「裏切り」は、対立し、前者が後者のモチーフを弱めてしまふ故に、班昭を本作で登場させなかったと考えられる。

四、班超の生きる意味

山本健吉氏は本作について「後漢の人班超の伝記である。氏の西域への夢は、まず半生を西域で送った班超に対する深い親愛感となる。」と述べている。作品本文には、「傅介子」、「張騫」の名前も出ている。二人とも西域で功績のあった有名な人物である。本作の主人公を張騫でもなく、

傳介子でもなく、ほかならぬ班超にする理由は何だろうか。まず、史料の不足が考えられる。『漢書』における傳介子、張騫の記述は、『後漢書』「班超伝」よりはるかに短い。次に、三人の身分の相違が考えられる。三人は、將軍になつたが、張騫と傳介子は西域へ派遣された使者という印象が強い。一方、班超は西域で三〇年を暮らし、西域の經營者という印象がある。

最後は、班超と井上自身との類似性が考えられる。班超は、儒生或いは文人だったが、異域への進出を選び、武人になつた。班超が西域に入つた時の年齢は、四二歳であつた。井上は、医家出身であつたが、大学時代に医学を諦めた。さらに、大学卒業後、長い期間、新聞記者として活躍した。芥川賞受賞の二年後、新聞社から退社し、作家として独立した。芥川賞を受賞した時、井上は四二歳であつた。もつと細かく見ると、井上と班超の共通点はまだまだ見られる。例えば、井上と班超は、目的は異なるが、二人とも西域に強い興味を持っている。また、井上は老年の班超の帰国を望む心境に共感したのではないか。井上は昭和一二年に応召して、中国北部の各地に駐屯した。その一〇月一四日の日記に、以下のように書かれている。

五時半起床。情感に暖かみはなく、軍隊というところはただただつらいだけ。どうしてもそれまでは頑張らねばならぬ、あ、ふみよ！ 伊豆の両親よ、幾世よ！

この部分について、井上靖の次女・黒田佳子氏は「父が日記で何度も訴える「国に帰りたい、妻子に会いたい」の叫びは、恐らく殆どの兵隊たちの本音だつたらう。」と述べている。井上の日記によると、一〇月の後半から高熱や下痢などの病気に苦しんでいたことが分かる。

それに対し、本作における班超は、年を取って、重い病気にかかったことにより、「上疏文」を書き、帰国を願っていた。もちろん、班超が西域へ行くのは自分の意思である。それに対して、井上が異域の中国に派遣されたのは国の命令である。二人の異域へ行く時の気持は異なるが、異域にあつて母国へ帰りたいと思う心境は類似している。そのため、井上は班超の故国を思慕する情に共感したと思われる。上述した理由で、井上は班超に「親愛感」を持ち、小説の主人公を班超にしたと考えられる。

本作品の舞台は、西域に限られている。井上にとつて、西域は「未知、夢、謎、冒険、そういったものがいっぱい詰め込まれてある。」という。井上が初めて詳しく西域の環境、風土などを描いた小説が「異域の人」である。井上自身が創作した「西域物」で、「異域の人」の主要舞台は「タクラマカン沙漠周辺地帯」である。本作を創作した時点では、井上は西域へ入つたことはなかった。沙漠のイメージの形成は、先述した歴史資料に基づくことに加え、井上自身の経歴と関わりがあると思われる。以下、井上靖の詩「流星」(『詩人』昭和二二・四)を引用する。

流星

高等学校の学生のころ、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横たわって、星の流れを見たことがある。十一月の凍った星座から、一条の青光をひらめかし忽焉とかき消えたその星の孤独な所行ほど、強く私の青春の魂をゆり動かししたものはなかった。私はいつまでも砂丘の上に横たわっていた自分こそ、やがて落ちてくるその星を己が額に受けとめる、地上におけるただ一人の人間であることを、私はいささかも疑わなかった。(後略)

この詩の中で、「私」は自分を広い空間に置き、流星を自分の額に受けとめる。自分の小ささと宇宙の広大さを感じたのだろう。この砂丘の体験は井上に大きな影響を与えた。沙漠に関するイメージの形成に役に立つたと考えられる。井上は自作「流星」について、後に次のように述べている。

日本海の砂丘で流星を見た時から、それまでに二十年の歳月が経過している。そしていまこの小文を綴っている私は「流星」を書いた時から更に二十年先の人生を歩んでいるわけである。(中略)

人生須臾という言葉があるが、まことに人生は須臾であり、その短い間に、青春と壮年と老いとが詰まっ

ていて、未熟も成熟も、未完成も完成もないようなものである。(後略)

井上の西域への憧れは金沢の旧制第四高等学校の学生時代から始まった。その時、金沢の砂丘で「人生須臾」の悟りを得た。班超の一生は、西域の歴史でまさに一粒の沙にすぎないと言えるだろう。井上は、班超の三〇年の異域生活の一つの短編に綴った。本作では、「未知」の異域で活躍した班超の偉大な功績を示しながら、裏の苦しみ、孤独も描いている。班超が西域で遭遇した裏切り、打撃も、受けた名誉、財宝も、長い西域の歴史ではただの「須臾」にすぎない。

また、井上は本作を通して、西域の「三絶三通」²⁰を暗示している。「後漢書」「西域伝」に、「之より、西域と漢は三絶三通となり」という記述がある。「三絶三通」とは、中国と西域の交流が三回断絶し、また三回開通したことである。班超が生きていた後漢の時代、西域は「三絶三通」となり、漢民族にとって多くの「未知、夢、謎」が詰め込まれた世界となった。そこから多くの人の夢が生じた。班超は、その未知の世界へ入り、冒険の旅を始めた。本作品は、西域の「三絶三通」をほぼ全部描いている。班超は異域の生活で、「重要なものを失い続けた」のであり、その旅は間違はなく孤独な旅であった。

班超は疏勒の王忠に裏切られ、後に自ら刀を以て忠を斬った。その時、「胡鬼！」と叫んだ。この場面は、典拠

を改変したところである。この改変を通して、班超の孤独の深さが一層強調されている。

「胡」という文字は、中国の北方または西方の異民族のことを指す。「胡」と同様に、本作の作品名「異域の人」における「異域」は、異民族の地域、異国を指す。「異域の人」とは、班超のような西域にいる漢民族の人を指しているだろう。一方、西域にいる異民族の人と解釈してもおかしくない。

本作には、多くの漢族の武将が登場しているが、異民族の人々（例えば、鄯善王広、疏勒王忠、焉耆王広など）も登場している。さらに、本作品以降創作された「西域物」にも両方の登場人物が描かれている。「楼蘭」、「蒼き狼」、「僧伽羅国縁起」などの作品の舞台は異域（西域）であり、主人公も異民族の人である。そのため、本作品の作品名の「異域の人」には、二重の意味が含まれているといってもよいだろう。

本作での班超は、立身出世のため、耿恭のような人々と一緒に戦いつつ、西域の一部を統一した。その一方で、同盟者の裏切り、故国の人の猜疑、重用した部下の逃亡などの打撃も続けた。この「胡」に関連して、班超が帰国した後、洛陽の町に「胡風と胡俗が目立」ち、「路行く人の服装はいずれも眼を奪うばかり華美であった」という描写がある。しかし、班超自身、幼童に「胡人」と呼ばれる。班超は西域にいる漢民族であると同時に、西域にいる異民族と化してしまっただのである。

作品の最後は、玉門関が固く閉められるところで結ばれる。では、本作において班超が功績を立て、西域諸国を漢の統治下に収め、西域と通商したことなどはすべて無意味だったといえるのだろうか。

実は、本文の最後、西域を放棄したのは西紀一〇七年と書かれているが、『後漢書』によると、一三三年に班超の息子班勇により、西域は「三通」となった。本作品の最後に描かれている玉門関の閉門は、その閉門を暗示するのではない。班超の功績はけっして無意味ではない。中国と西域の交流史は、張騫、班超、耿恭のような人によって築かれた。井上は班超の一生を描くことで、「未知、夢、謎、冒険」が詰め込まれた異域（西域）を表現したのである。

五、おわりに

本作は井上靖の「西域物」で、初めての本格的な作品と見られる。他作品と比較すると、後に創作された「西域物」と多くの関連があることが分かる。例えば、「異域の人」の翌年に発表された作品、「僧行賀の涙」における行賀は日本から異域へ留学する僧侶と設定されている。班超が三〇年の異域生活を送ったように、行賀の異域生活は「在唐期間三十一年」にもわたる。帰国後、行賀は日本語も忘れかけており、ほかの僧の試問に日本語で答えられない。

また、本作の脇役の趙と班超との設定は、後に発表される『敦煌』における趙行徳と朱王礼との関係の設定と似て

いる。本作の趙は班超にとつて、「片脚」のような存在であり、異域で強固な同盟関係を持つている。それに対し、『敦煌』における趙行徳は、西域に入った後、儒生から武人に成長する。漢字を読む才能を持っているため、朱王札に重用される。二人は戦いで同盟関係を結ぶが、異民族の女（回鶻王族の女）の死により、二人の間に争いが起こる。「異域の人」における趙と班超との関係の設定は、趙行徳と朱王札の初期型と考えられる。

本稿では、代表的な用例を抽出し、典拠との比較を行った。作者自身により「史実に則した」作品だと述べられているが、史料の活用に工夫したところが多く見られる。

「異域の人」は井上靖にとつて、「特別な作品」であり、想像した西域の「未知、夢、謎、冒険」を初めて具体化した作品である。井上は青春時代を回顧し、金沢の砂丘で「人間の微小」、「人生の須臾」などを感じた。その感情を本作品における班超に託し、表現したのである。

※ 本文の引用は、総て『井上靖全集』第四卷（新潮社、平成七・八）による。また、引用部の傍線及び（略）等は、筆者による。

〔注〕

(1) 井上靖「二十四の小石」（『名作自選 日本現代文学館 猟銃 他二十三篇』ほるぷ出版、昭和四七・一二）

(2) 上述の引用のほか、山本健吉「解説」（『井上靖文庫』1、

新潮社、昭和三五・一二）で、「孤独の世界」は「井上氏が『猟銃』以来かきつけてきた主題」であると述べている。

(3) この点について、井上靖は、多くの文章で言及している。例えば、「あとがき」（『西域の歴史』筑摩書房、昭和三八・四）で、「高等学校の学生の頃から西域関係の旅行記を読み出し、とうとう今までそれは続いている。」と述べている。また、『西域物語』（朝日新聞社、昭和四四・一二）で、「私は学生時代に西域というところへ足を踏み入れてみたいと思った。」と述べている。

(4) 奥野健男「『蒼き狼』解説」（『蒼き狼』旺文社、昭和四五・七）

(5) 小説「漆胡榊」における四つのエピソードは、以下のようによに要約できる。拙稿「井上靖「漆胡榊」論——「西域物」の源泉——」（『現代社会文化研究』第六三号、平成二八・一二）参照。

A 鄯善国の祭壇にある葡萄酒が入っている漆胡榊と、若者が匈奴に攻撃され、漆胡榊を失うこと。（紀元前二二六年）
B 匈奴の酋長の捕虜陳が、族長の妻女を連れ、水が入っている漆胡榊を持って、逃亡すること。（元狩四年、紀元前一一九年）

C 小吏の張某が、農家の老婆から胡国のもの・漆胡榊を盗むこと。（元嘉二年、紀元五一二年）

D 聖武帝の遣唐使の随行員、大聖寺某なる者が、自分の身代わりとして、漆胡榊を故国に送ること。（天平六年、紀元七三四年）

(6) (1)に同じ。

- (7) 井上靖が書いた推薦文に拠る。亀井勝一郎編『続歴史小説の旅』(人物往来社、昭和三八・五)の帯に掲載された。
- (8) 高木伸幸「井上靖「異域の人」考——「孤独」と西域の沙漠——」(『井上靖研究』第三号、平成一六・七)
- (9) 井上靖「小説「敦煌」ノート」は、昭和五五年六月、日本放送出版協会発行の「シルクロード 絲綢之路2 敦煌沙漠の大画廊」に「敦煌と私」の総題で発表したうちの最後の一篇である。
- (10) 井上靖、篠田一士、辻邦生「わが文学軌跡」(中央公論社、昭和五二・四)
- (11) 「小説「敦煌」ノート」で、「敦煌」を執筆中、藤枝晃氏から借りた晋の時代の高居晦の「高居晦于闐紀行」を参考にしたと述べている。
- (12) 孟憲実「西漢戊己校尉新論」(『広東社会科学』二〇〇四年第四期、二〇〇四・二)、李炳泉「西漢戊己校尉建制考」(『史学月刊』二〇〇二・六)。これらの研究によると、「戊己校尉」に関する論争は、現代まで続いている。
- (13) 鄧桂姣『漢代扶風班氏家族文化与文学研究』(揚州大学博士論文、二〇一四・六)
- (14) (2)に同じ。
- (15) 井上靖「中国行軍日記」の引用は、宮崎潤一「井上靖の従軍体験からみえるもの」(『群馬の思想・文学・教育』、平成二七・一二)の付録にある資料「西川軍隊手帳」と「井上靖中国行軍日記」の比較による。
- (16) 黒田佳子「80年前の時を訪ねて」(『井上靖「中国行軍日記」井上靖文学館、平成二八・三三)

- (17) 井上靖『西域物語』(朝日新聞社、昭和四四・一一)
- (18) 井上靖「中国語訳井上靖西域小説選」(『井上靖西域小説選』新疆人民出版社、一九八五・二)
- (19) 井上靖「流星」(自作自注)(高田敏子編「わが詩わが心」芸術生活社、昭和四五・一二)
- (20) 苗普生は「略論東漢三絶三通西域」(『新疆師範大学学报』一九八五年第二期、一九八五・七)で、後漢の時代における中国と西域の交流を考察している。
- 苗氏の研究によると、一回目の「絶」は、王莽が叛乱を起こした光武帝の時代であり、二回目の「絶」は建武元年(七六年)に、匈奴の攻撃を受け、都護を廢した時である。三回目の「絶」は班超の没後の五年後(一〇七年)、西域都護を廢したころである。それに対し、一回目の「通」は、永平一六年(七三年)、匈奴を撃ち、西域諸國を降伏せしめるに到った時である。二回目の「通」は、永元三年(九一年)に大月氏退き、匈奴は破れ、班超を西域都護に命じた時である。三回目の「通」は、延光二年(一二三年)に、班超の息子・班勇が西域長史(西域を管理する官職)に命ぜられた時である。

【付録】

「異域の人」(『群像』昭和二八・七) 作品本文と典拠の比較

◆資料1

〈作品本文〉

班超は字は仲升、『史記後伝』の作者班彪の子として、建武

八年（西紀三二年）に平陵に生まれる。兄固は後漢の儒家として『漢書』の撰者として有名である。班超は幼時から大志を抱き、常に進んで艱苦を取り、書伝を渉獵して倦まなかつた。

〔典故〕『後漢書』「班超伝」

班超、字仲升、扶風平陵人、徐令彪之少子也。為人大志、不修細節。然内孝謹、居家常執勤苦、不恥勞辱。有口弁、而涉獵書伝。

〔訳文〕

班超、字は仲升、扶風平陵の人、徐の令彪の少の人なり。人と為り志有つて細節を修めず。然れども内は孝謹にして、家に居りて常に勤苦を執り、勞辱を恥とせず。口弁有つて而も書伝を渉獵す。

◆資料2

〔作品本文〕

ある時筆を投じて、嘆じて曰く「大丈夫他に志略なし、猶當に傅介子、張騫の功を異域に立て、以て封侯を取りしを効ふべし。安んぞ能く久しく筆硯の間を事とせんや」——『後漢書』班超伝は斯う伝えている。

〔典故〕『後漢書』「班超伝」

嘗輟業投筆歎曰、「大丈夫無它志略、猶當効傅介子、張騫立功異域、以取封侯、安能久事筆硯間乎。」

〔訳文〕

嘗つて業を輟め筆を投じて歎じて曰わく、「大丈夫他の志略無きも、猶お當に傅介子、張騫に効いて功を異域に立て、以て封侯を取るべし。安んぞ能く久しく筆硯の間に事めん」。

◆資料3

〔作品本文〕

光武帝は勞多くして功少ない西域経略に対し消極的であつたし、明帝また内治に忙しく強いて異民族との間に事を構える氣持は持つていなかつたのである。

〔典故〕

①『後漢書』「西域伝」第七八

建武中、皆遣使求内属、願請都護。光武以天下初定、未遑外事、竟不許之。

②羽田亨「漢人の西域経営と西域文明」〔西域文明史概論〕昭和六・四、弘文堂

後漢の始祖光武帝の一代は内治に努力して對外経略を顧みる事は無かつたやうであるが、次の明帝はその末年近い頃にまたこれに着手して（後略）

〔訳文〕

①建武中（二五—五六）、皆な使を遣わして内属せんことを求め、都護を願ひ請う。光武、天下初めて定まり、未だ外事に遑あらざるを以て、竟に之を許さず。

◆資料4

〔作品本文〕

班超は部下の誰よりも軀は縦横一廻り大きかつた。一見すると、図体の大きい朴訥な風貌だったが、眼は鋭く、異様な光を帯んでいた。そして口を開く前にその眼で相手を見据える癖があつた。見据えられた相手は例外なく畏怖を感じた。平生は無

口であつたが、いったん話すと、低い声で諄々と説くように語った。

〔典故〕「後漢書」「班超伝」

生燕頰虎頭、飛而食肉、此万里侯相也。

〔訳文〕

生は燕の頰に虎の頭、飛びて肉を食らわん。此れ万里侯の相なり。

◆資料5

〔作品本文〕

みな匈奴の西、烏孫の南にあり、南に大山(天山山脈と崑崙山脈)あり、中央に河(タリム河)あり、東西六千余里、東は即ち漢に接し、扼するに玉門、陽関を以てし、西は即ち限るに葱嶺(パミール高原)を以てす。

〔典故〕「漢書」「西域伝」第六六上

皆在匈奴之西、烏孫之南。南北有大山、中央有河、東西六千余里、南北千余里。東則接漢、扼以玉門、陽関、西則限以葱嶺。

〔訳文〕

いずれも匈奴の西、烏孫の南に所在した。その南北に大山脈があり、中央には河があつて、東西六千余里、南北千余里にわたつていた。東は漢に接しているが、玉門関と陽関とで塞がれ、西は葱嶺で限られていた。

◆資料6

〔作品本文〕

住民はアーリヤ人種のイラン系に属する種族で、当時漢人か

らは一括して胡人と呼ばれていた。

〔典故〕羽田亨「漢人の西域経営と西域文明」(西域文明史概論)

(前略) 古くから西域に居住して居つた民族は最も普通に考へてアーリヤ人種であり、特にその中の波斯高原地方に住したイラン種の系統に属するものであつたと思われる。

◆資料7

〔作品本文〕

班超及び三十六人の部下は、玉門関を出て、沙漠を旅すること十六日、死人の枯骨以外何物を見なかつた。文字通り上に飛鳥なく下に走獸ない沙の海である。(中略) 十七日目の朝、彼等は昨日までとは全く異なつた塩質の堅い土層の上に立つていた。更に行くこと一日にして、遠くに城邑を見た。鄯善國であつた。

〔典故〕「法顯伝」

沙河中多有惡鬼熱風。遇則皆死、無一全者。上無飛鳥、下無走獸。遍望極目、欲求度処、則莫知所擬。唯以死人枯骨為標幟耳。行十七日、計可千五百里、得至鄯善國。

〔訳文〕

沙河の中は悪鬼熱風有ること多し。遇えば則ち皆死す、一も全き者無し。上に飛鳥無く、下に走獸無し。遍望極目、度る処を求めんと欲して、則ち擬する所を知る莫し。唯、死人の枯骨を以て標幟と為すのみ。行くこと十七日、計る可そ千五百里、鄯善國に至るを得たり。

◆資料 8

〔作品本文〕

班超は、翌十七年、三度西域に入つて、西域では一番の奥地にある疏勒国に使した。洛陽を隔たること一万三百里である。当時疏勒は、隣国龜茲に依つて王を殺され、龜茲人兜題を王に戴いていた。不満は国内に溢れていた。(中略)

班超は国を龜茲の隸属から救うために、兜題の居城に赴き、隙を乗じて、兜題を斬り、故王の兄の子である忠を王位に就けて、以て国民の信望を得た。

当時疏勒は戸数二万一千の城国で、兵三万余を持つて居た。

〔後略〕

〔典故〕

①『後漢書』「西域伝・疏勒」第七八

疏勒国去長史所居五千里、去洛陽万三百里。領戸二万一千、勝兵三万余人。明帝永平十六年、龜茲王建攻殺疏勒王成、自以龜茲左侯兜題為疏勒王。冬、漢遣軍司馬班超劫縛兜題、而立成之兄子忠為疏勒王。

②『後漢書』「班超伝」第三七

時龜茲王建為匈奴所立、倚恃虜威、扼有北道、攻破疏勒、殺其王、而立龜茲人兜題為疏勒王。(中略)因立其故王兄子忠為王、国人大悦。忠及官属皆請殺兜題、超不聽、欲示以威信、积而遣之。疏勒由是与龜茲結怨。

〔訳文〕

① 疏勒国は長史の居る所を去ること五千里、洛陽を去ること万三百里。領戸は二万一千、勝兵は三万余人。明帝の永平十六

年(七三)、龜茲王の建攻めて疏勒王の成を殺し、自ら龜茲の左侯の兜題を以て疏勒王と為す。冬、漢は軍司馬の班超を遣わして劫して兜題を縛らしめ、而して成の兄の子の忠を立てて疏勒王と為す。

② 時に龜茲王の建は匈奴の立つる所為りて、虜の威に倚り恃みて北道を扼有し、攻めて疏勒を破つて其の王を殺し、而して龜茲の人兜題を立てて疏勒王と為す。(中略)因つて其の故の王の兄の子の忠を立てて王と為す。国人大いに悦ぶ。忠及び官属は皆な兜題を殺さんことを請いしも、超聽かず、示すに威信を以てせんと欲し、积して之を遣る。疏勒は是れに由つて龜茲と怨みを結ぶ。

◆資料 9

〔作品本文〕

(前略) 漢はここに西域都護を復活し、陳陸を都護とし、耿恭を戊校尉、閼龍を己校尉に任命した。

陳陸と耿恭は車師後国の金蒲城に駐屯し、兵数百名が配された。閼龍は車師後国の柳中城に、同じく数百名の屯田兵を駐屯した。

〔典故〕『後漢書』「耿恭伝」第九

始置西域都護、戊己校尉、乃以恭為戊己校尉、屯後王部金蒲城、謁者閼龍為戊己校尉、屯前王柳中城、屯各置數百人。

〔訳文〕

始めて西域都護、戊己校尉を置くや、乃ち恭を以て戊己校尉と為して後王部の金蒲城に屯せしめ、謁者の閼龍を戊己校尉と

為して前王の柳中城に屯せしめ、屯ごとに各々數百人を置く。

◆資料10

〔作品本文〕

そして三月、突如匈奴は二万の大軍を以て移動して来て、車師後国を困んだ。金蒲城の陳陸と耿恭は三百の兵を率いてこれを迎え撃った。この時耿恭は、漢家の神箭なりと予め匈奴に告知しておいて、敵陣に毒矢を放ち、匈奴の陣営を震撼せしめた。そして更に暴風雨に乗じて敵陣を襲撃して匈奴を北方に奔らせた。

〔典故〕『後漢書』「耿恭伝」第九

明年三月、北单于遣左鹿蠡王二万騎擊車師。恭遣司馬將兵三百人救之、道逢匈奴騎多、皆為所破。匈奴遂破殺後王安得、而攻金蒲城。恭乘城搏戰、以毒藥傳矢。伝語匈奴曰、「漢家箭神、其中瘡者必有異。」因發彊弩射之。虜中矢者、視創皆涉、遂大驚。会天暴風雨、随雨擊之、殺傷甚衆。匈奴震怖、相謂曰、「漢兵神、真可畏也。」遂解去。

〔訳文〕

明年三月、北单于は左鹿蠡王二万騎を遣わして車師を撃たしむ。恭は司馬を遣わして兵三百人を將いて之を救わしめたるも、道にて匈奴の騎多きに逢い、皆な破する所と為る。匈奴遂に破りて後王安得を殺し、而して金蒲城を攻む。恭は城に乗りて搏戦し、毒藥を以て矢に傳り、匈奴に伝語して曰わく、「漢家の箭は神なり。其の中り瘡つく者は必ず異有らん」。因つて強弩を發して之を射る。虜の矢に中る者、創の皆な涉たるを視て遂に大いに驚く。会ま天暴かに風雨し、雨に隨いて之を撃ち、殺

傷すること甚だ衆し。匈奴震え怖え、相い謂いて曰わく、「漢の兵は神なり。真に畏る可きなり」。遂に解き去る。

◆資料11

〔作品本文〕

異域の孤城に籠城する耿恭救出の七千の兵が派遣されたのは、建初元年（西紀七十六年）正月のことであった。

救援軍は車師前国の王城交河城を撃ち、三千八百の首級と三千余人の捕虜、三万七千頭の駱駝と羊を獲た。（後略）

〔典故〕『後漢書』「耿恭伝」第九

（…合七千余人）。建初元年正月、会柳中擊車師、攻交河城、斬首三千八百級、獲生口三千余人、駱駝馬牛羊三万七千頭。北虜驚走、車師復降。

〔訳文〕

（…合して七千余人を發せしむ）。建初元年（七十六）正月、柳中に會して車師を撃ち、交河城を攻め、首を斬ること三千八百級、生口三千余人、駱駝馬牛羊三万七千頭を獲たり。北虜驚き走れ、車師復を降る。

◆資料12

〔作品本文〕

班超は自分の身に關する信ずべからざる風評が洛陽に於いて行われていることを知った。それは、彼が異域にあつて、愛妻と愛子を擁し、安逸をむさばり、祖国を顧みる心を失くしてゐるといふのであつた。

〔典故〕『後漢書』「班超伝」第三七

帝知超忠、乃切責臣曰、「縦超擁愛妻、抱愛子、思歸之士千餘人、何能盡與超同心乎。」

〔訳文〕

帝、超の忠なることを知り、乃ち切しく臣を責めて曰わく、「縦い超は愛妻を擁し、愛子を抱くとも、帰らんことを思うの士は千余人。何ぞ能く尽く超と心を同じくせん乎。」

◆資料13

〔作品本文〕

班超にとつて、忠の反抗は、全く理解し難い夷狄人の心であつた。二年後の元和三年、班超は康居の軍を率いて来攻した忠を捕縛するや、自ら刀を抜いてその前に立つた。

〔典拠〕『後漢書』「班超伝」第三七

超密勒兵待之、為供張設樂。酒行、乃叱吏縛忠斬之。

〔訳文〕

超密かに兵を勧えて之を待ち、為に供張して樂を設く。酒行るや、乃ち吏を叱して忠を縛りて之を斬る。

◆資料14

〔作品本文〕

永元二年五月（西紀九〇年）班超は葱嶺の向うにある大月氏の軍勢七万の攻撃を受けた。

〔中略〕

ために大月氏は大いに怖れて、ついに班超に和を求めて来た。和が成立して暫くすると、葱嶺を越えて、符拔、獅子、珠玉などが班超のもとに贈られてきた。

〔典拠〕『後漢書』「班超伝」第三七

初、月氏嘗助漢擊車師有功、是歲貢奉珍宝、符拔、師子、因求漢公主。超拒還其使、由是怨恨。永元二年、月氏遣其副王謝將兵七万攻超。

〔訳文〕

初め、月氏は嘗つて漢を助けて車師を撃ちて功有り、是の歲珍宝、符拔、師子を貢奉し、因つて漢の公主を求めしも、超拒みて其の使を還す。是れに因つて怨恨す。永元二年（九〇）、月氏其の副王の謝を遣わして兵七万將いて超を責めしむ。

◆資料15

〔作品本文〕

班超が上書して、帰国を願つたのは永元十四年（西紀一〇二年）の初めである。

自ら寿を全うして屯部に終らば誠に恨むところなし。然りとはいえども、後世或いは、**固**を名ざして西域に歿すと為さん。臣敢えて酒泉郡に到るを望まず、願わくば生きながらにして玉門関に入らんことを。……

沙漠に命を延ぶるを得て今に至つて三十年、骨肉生離して復た相識らず。与に相隨う所の人皆すでに物故せり。**固**最もながらえて今七十に到らんとし、衰老病を蒙りて頭髮黒きなし。……班超はその長文の上書文の中に書いた如く、異域に留まること三十年、七十一歳になっていた。この班超の願いは和帝に容れられて、彼に故国帰還の命令が下つたのは、その年の春であつた。

〔典拠〕『後漢書』「班超伝」第三七

超自以久在絶域、年老思土。十二年、上疏曰、「(前略)如自以寿終屯部、誠無所恨、然恐後世或名臣為没西域。臣不敢望到酒泉郡、但願生入玉門關。(後略)」

而超妹同郡曹寿妻昭亦上書請超曰、「(前略)至今積三十年、骨肉生離、不復相識。所与相隨時人士衆、皆已物故。超年最長、今且七十。衰老被病、頭髮無黑。(後略)」書奏、帝感其言、乃徵超還。

〔訳文〕

超自ら久しく絶域に在るを以て、年老いて土を思う。十二年(二〇〇)、上疏して曰わく、「(前略)如し自ら寿を以て屯部に終れば、誠に恨む所無きも、然れども後世或いは臣を名んで西域に没せりと為さんことを恐る。臣敢えて酒泉郡に到ることを望まず、但だ願わくは生きて玉門關に入らんことを。(後略)」而して超の妹の同郡の曹寿の妻なる昭も亦た上書して超を請いて曰わく、「(前略)今に至る三十年を積ぬ。骨肉生きながらに離れ、復た相い識らず。与に相い随いし所の時人士衆は、皆な已に物故す。超は年最も長け、今且に七十ならんとす。衰老して病に被り、頭髮は黒きもの無く(後略)」書奏す、帝、其の言に感じ、乃ち超を徵して還す。

❖ 『後漢書』本文の引用は、吉川忠夫訓注『後漢書』(全一〇冊・別冊一、岩波書店、平成一三・九、平成一七・一一)と、その底本である清の時代の王先謙編『後漢書集解』(一九一五年に虚受堂より刊行。その影印本は、一九八四年二月、中華書局より刊行。)に拠る。訳文は、吉川忠夫氏の訓注を参照した。『漢書』本文及び訳文の引用は、小竹武夫訳『漢書』(筑摩書房、昭和五

四・一二)に拠る。『法顯伝』本文は、長澤和俊編『法顯伝』(雄山閣、平成八・九)における、「北宋本」・「南宋本」・「石山寺本」の影印本を参照し、訳文は長澤氏の訳注を参照した。また、『西洋文明史概論』本文の引用は、羽田亨『西洋文明史概論』(弘文堂、昭和九・一〇)に拠る。

〔付記〕

本稿は二〇一六年度井上靖研究会(冬季)(二月四日・於國學院大學)の口頭発表をもとにまとめたものである。会場内外で有益なご教示を頂いた方々に厚く御礼申し上げます。